

地域医療連携だより

H22.1
第23号**兵庫医科大学病院**〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1番1号
TEL.0798-45-6111(大代表)
<http://www.hosp.hyo-med.ac.jp/>

新年のご挨拶

病院長 太城 力 良



新春の誓いー「心して学ぶ」

平成 22 年、新年明けましておめでとうございます。お揃いで健やかに新年をお迎えのこととおよろこび申し上げます。

昨年の兵庫医大病院での大きな出来事と言えば、15 年ぶりに厚労省、近畿厚生局、兵庫県による特定共同指導を受けたことです（2009 年 10 月 3 日に正式通知がきて、10 月 29、30 日に実施）。指導にて問題を指摘された項目については支払基金等より受け取っていた診療報酬

の自主返還を迫られます。幸い本学では病院教職員が日常より医学・医療の知識だけでなく保険制度や保険診療について学び、指導前の準備にもご協力いただいたお陰で高額な自主返還は免れそうでございます（交渉中）。しかし、学び不足にいた部分、知らなかった部分があったのも事実であり、法律の前では「知らなかった」は通用しないことを実感しています。

本年の秋には、病院機能評価 Ver.6 を受審予定です。これには経済的な制裁はありませんが、医療の質や安全に対する体制が細かくチェックされます。自分自身を省み、所属部署、病院全体を再点検するよい機会と考えています。このような第三者によるチェックは、独断を避けよりよい病院を構築する過程で必要なものと思っています。この点、皆様方、連携施設の貴重なご意見も是非、お聞かせ願いたく思っています。

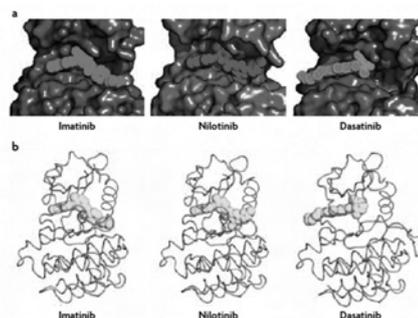
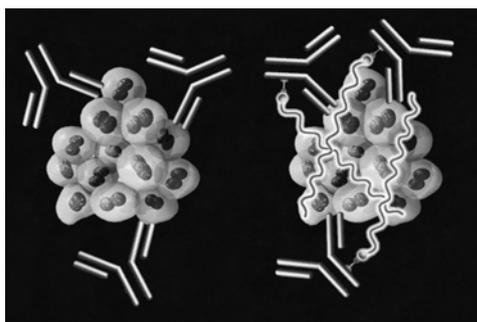
「心して学ばざる身の悲しさよ、事起きて知る法の厳しさ」という詠み人知らずの狂歌があります。医学・医療は絶え間なく進歩していくので、生涯、向上心、勉学意欲をもち、思いやる心を持ってすべての面で心して学ばねばならないと心を新たにしております。本年も、皆様方にとってよい年であることを願っております。また、ご指導をお願いするとともに当病院との連携にご協力のほどをお願い申し上げます。

治療最前線

● 分子標的薬とハイリスク造血幹細胞移植 ●

血液内科 池亀 和博、小川 啓恭

白血病や悪性リンパ腫といった血液の腫瘍は、いわゆる“がん (= 悪性腫瘍)”ですが、治療によっては完治させることができます。特に近年、分子標的薬と呼ばれる一群の薬が開発され、より腫瘍細胞特異的（ピンポイント）に、すなわち副作用が少なく、治療できるようになってきました。分子標的薬は、腫瘍細胞の表面抗原を特異的に認識する抗体医薬と、腫瘍細胞で活性化している増殖シグナルを阻害するタイプの薬に分けられます。白血病や悪性リンパ腫の腫瘍細胞では、その表面抗原を同定することは容易で、一般診療としてすでに用いられています。現在も様々な表面抗原に対する抗体が次々に開発されると同時に、この抗体に抗癌剤や放射性同位元素をつけることで、抗腫瘍効果の増強が期待できるようになりました。兵庫医科大学（以下、兵庫医大）の血液内科ではPETセンターと共同で、このような先進的薬剤の臨床導入について積極的に取り組んでいます。同様に血液腫瘍では染色体転座に代表されるように、腫瘍化に関わる増殖シグナルもかなり解明されています。この増殖シグナルの阻害剤により、従来は致死的であった白血病が、外来で治療できるようになりました。現在では第2、第3世代の治療薬が次々と開発されており、兵庫医大血液内科においても多数例の臨床治験が行われています。



分子標的薬を中心とする薬物療法の進歩にも関わらず、それだけでは治りきれない患者さんというのは、どれだけ薬が進歩しても存在します。血液内科医は、従来より、造血幹細胞移植という最終兵器についても研究と経験を積み重ねてきました。最近では、造血幹細胞移植とはドナーさんの同種免疫を利用した強力な免疫療法であると認識されるようになってきました。薬物療法が進歩すればするほど、移植にまわってくる患者さんは、治療抵抗性（悪性度が高い）であったり、病期が進行期であったりします。造血幹細胞移植を担当する施設は、このようなニーズに対して最後の砦となる必要があります。兵庫医大血液内科では、このようなハイリスク造血幹細胞移植を中心テーマとして、血縁HLA適合移植はもとより、非血縁（バンク）移植、臍帯血移植、血縁HLA不適合移植といったすべての移植に対応できるようにしています。現在では移植件数、成績とも全国有数の施設となっており、日本全国から、他の施設では治療が望めない患者さんが紹介されてきています。



一方、これらの血液内科領域をすべて兵庫医大のみでカバーすることは、ソフト、ハードの面からも困難となってきました。そこで兵庫医大血液内科では、我々の先輩や仲間がいる関連病院と一体となって、地域の血液疾患の患者さんを治療していこうと考えています。標準的な抗癌剤治療については、それらの臨床に長けた関連病院にお願いしており、移植が必要になったら兵庫医大に転院していただくようにしています。こうすることにより、移植でしか助からない患者さんに、有効にベッドを提供することが可能となってきました。血液内科の担当する領域は、上記のように、ピンポイント攻撃から最終兵器に至るまで幅が広く、その適応については専門的知識と経験を要します。ご紹介いただいた患者さんについては、個々の例では必ずしもご要望にお応えできない点があるかもしれませんが、総合的に最善と考えられる方針を、一丸となって見出したいと考えています。



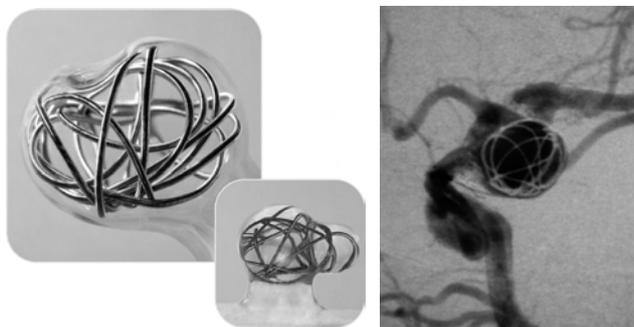
● 脳動脈瘤のコイル塞栓術 ●

脳神経外科 白川 学、内田 和孝

当院脳神経外科では、ここ一年で脳動脈瘤に対する治療においてコイル塞栓術の割合が増加しております。以前より低侵襲である脳血管内治療が必要と考え施行してはいましたが、デバイスの質の悪さや、種類の少なさ等があり開頭術ができない症例にしか行っていませんでした。しかし最近、脳血管内治療のデバイスの進歩が著しく、マイクロカテーテルやマイクロガイドワイヤーが良くなり、バルーンカテーテル等も格段に良くなったため、今までコイル塞栓術に適さなかった動脈瘤でもバルーンカテーテルを用いることによってコイル塞栓が可能となってきております。塞栓物質であるコイルにおいては、以前までプラチナ性の機械式離脱コイルしかなかったのが、電気離脱式や水圧離脱式に代わり、コイルの形状も 2D から 3D へと変化しています。現在は生体反応性コイルが発売され、コイル塞栓術の一番の欠点であった長期予後の改善が期待されています。

エビデンスにおいても海外での報告ですが、ISAT でくも膜下出血においてコイル塞栓術はクリッピング術より優れた治療法と報告されています。従って現在ではクリッピングでもコイル塞栓術でも共に可能な症例ではコイル塞栓術を選択するようになっております。

今後、デバイスの進歩とともにほとんどの症例でコイル塞栓術が可能となると考えられ、日々精進しております。



小児外科 日帰り手術のご紹介

患者さんならびにご家族の負担軽減・利便性向上のために、従来 2 泊 3 日程度で行っていた小手術・検査処置に対して、平成 21 年 5 月より日帰り手術を始めました。対象となる主な手術は、小児の鼠径ヘルニア根治術、臍ヘルニア修復術、体表腫瘍切除術などです。最近の主な術式である鼠径ヘルニアに対する腹腔鏡手術も日帰り手術の対象となります。

外来にて手術日程を決めたあと、術前検査、麻酔科診察を外来で済ませて頂きます。

手術前日に来院して頂き、手術前の診察と手術の詳しい説明を致します。

手術当日は朝 8 時に来院して頂き、午前中に全身麻酔で手術を行います。

手術後の経過が問題なければ、手術当日の夕方にはご帰宅いただけます。

日帰り手術に関するご質問や具体的な適応基準につきましては、下記までお問い合わせください。

お問い合わせ先：小児外科外来 TEL:0798-45-6250, 6252

第7回 専門看護師・認定看護師による研修会 開催報告

地域医療・総合相談センター 看護師長 片岡 優実

当院では地域連携に関わる看護師の皆様のお役に立てるよう平成17年より「専門看護師・認定看護師による研修会」を開催しています。

昨年10月3日(土)、第7回研修会として「新型インフルエンザの対応について」というテーマで、感染管理認定看護師である当院感染制御部 一木 薫 看護師長による講義を行いました。

タイムリーなテーマでみなさんの関心もとても高く、近隣の病院より77名、訪問看護ステーションより18名、計95名の参加がありました。

講義では、インフルエンザウィルスの基本的な説明から新型インフルエンザの特徴、適切なマスクの使用、手洗い方法などの感染予防策、家族での発生時の対応方法などについて話がありました。ご参加いただいたみなさんは配付した資料にさらに熱心にメモを取りながら聴いておられ、質疑応答でも医療者としての対応について、現在起こっている状況にどのように対処したらよいか質問され、具体的なアドバイスを受けておられました。医療者としてあわてることなく正しい知識をもって適切な対処ができるようこの講義を役立てていただければと思います。

日ごろは、転院や在宅看護など地域連携で、近隣病院・訪問看護ステーションの看護師の皆様には大変お世話になっております。今後も皆様のお役にたてるよう、引き続き専門看護師・認定看護師による研修会を企画・ご案内していく予定ですので、よろしくお願いいたします。



第6回 兵庫医科大学病院 病診・病病連携の会 開催報告



昨年11月7日(土)、地域の医療機関の先生方との病診・病病連携の推進を図ることを目的として、「第6回病診・病病連携の会」を開催しました。

当日は地域の医療機関38施設の先生方をはじめ院内外で99名の参加がありました。

今回は話題提供として、当院産科婦人科 小森 慎二 診療部長による「子宮癌・卵巣癌の治療の現状」、内科 下部消化管科 福永 健 助教による「患者QOL向上を目指した当院における潰瘍性大腸炎患者の治療方策：外科-内科のseamless connectionを生かして」の講演を行いました。

ご参加いただいた先生方から多くのご意見、ご要望等をお寄せいただき活況な連携の会となりました。

また、講演会終了後の懇親会も今まで以上に盛り上がり盛会のうちに終了いたしました。

今後も地域連携を深めるため継続して開催する予定ですので、是非ご出席くださるようよろしくお願いいたします。

